

近世福建地域史の研究

陳 海 冰

南北朝以来の中原文化と人口の流入の歴史を踏まえ、近世の福建社会には、科挙合格者の著しい増加、朱子学の誕生、海外貿易の発展、およびユニークな文化の創出などの特徴があらわれる。それらを地域史研究という視点から、歴史的過程にどのように位置づけるかを考察することが本研究の目的である。そこで、閩の諸呼称、特に七閩から八閩への展開の歴史的な意義を明らかにすることを手掛かりに、宋以降福建に起こった海に関わる歴史的な諸事象の再検討を試みた。

序論では、本研究の歴史的な背景、研究の目的、方法、内容や先行研究の成果などについて論述した。

第一章では、宋以降の福建地域の歴史の実像をより鮮明にするため、閩の諸呼称のうち、特に七閩から八閩への展開の意義を検討した。中国古代には、儒教経典の中に記されて今の福建を意味する七閩という呼称は、四夷の範疇に位置づけられ、中央に直属しない辺境とみなす他者からの認識であった。やがて近世になり、南宋期には福建に朱子学の原郷という意識が起こり、朱子学を閩学とも呼ぶ

ほどになった。それは元代にも受け継がれ、朱子学が官学化された。そうした朱子学すなわち閩学の高揚が福建人の自我意識を高めた。それは八閩という呼称に強く反映されている。明代になると、閩学の隆盛により、七閩、八閩のいずれも、福建の自我意識に裏打ちされた呼称となった。『八閩通志』の出現はその象徴であった。それらは、かつて中央から格差のある辺境とみなされた呼称ではなく、また単に行政区画の数によるものでもない。

第二章では、媽祖信仰と福建地域社会の関連性を考究した。媽祖信仰は、宋代に福建で生まれ、北宋の宣和年間（一一一九―一二一五）に媽祖が国家祀典に列せられた。しかし、媽祖が封賜される前史、唐から宋にかけて、流入人口を主因とする、福建の人口増加はめざましく、地域社会に大きな変化をもたらした。海商、豪民、農民という異なる階層間の衝突を緩衝融和し、地域社会を再構成する役割を民間信仰に求める社会状況が生まれた。それが媽祖信仰の発祥の条件を整えた。また海外貿易と福建地域との強い関連から、媽祖信仰がはじまった。その一例として、北宋末に高麗に派遣された

路允迪の使者の船舶に媽祖が顯靈するという説話がある。そこには風習を共通とし、かつての同一の地方区分にあった福建の莆田と泉州の海商たちの活躍を反映している。なお高麗と泉州の繋がりには、南宋時代には、高麗での華人町の出現に関わる。そこに形成された泉州商人の情報収集と伝達の力量は、媽祖信仰が発祥し伝播するための基礎を形成していた。

第三章では、宋元時代の泉州の海外貿易が興隆する要因を地域史の視点から再検討した。北宋の元祐二年（一〇八七）に、泉州によりやく市舶司が置かれ、国際貿易が本格化した。南宋初期には、多くの皇族たちが泉州に移住したので、奢侈品を含む輸入品への需要と販路が広がった。元時代には、泉州は国際的な交易港である広州を凌駕し、『東方見聞録』に世界最大の国際貿易港であると記されるほどに成長した。そうした泉州地域の経済成長の背景に、教育の発展があることを明らかにした。

類例を見ない厳しい海禁政策を実施した明代であったが、ようやく隆慶年間（一五六七―一五七二）に、福建の月港が開港にいたる。第四章では、その歴史的背景について、地域史という視点から再考察を行った。明初の高麗は、福建においては、かならずしも規定通りに実現していたわけではなかった。それは、人びとの生計のためには海外交易を営まざるを得ないという福建社会の特性に由来した。政府による厳しい海禁策実施と、それに矛盾する対応処分が反復されることにより、福建社会において、統治の外へ人びとを押し出す

事態をもたらした。やがて地域において官民のいずれも、法の規格外の特権な関係網を形成させた。そこで、林希元という在地の郷紳に注目し、食糧不足、飢民の略奪、郷紳の横暴、地方官の怠慢、ポルトガル船との交易による共存関係などの事例に言及した。生存のため海上活動に依存度を高めた福建の民、および地方官と郷紳の裏面での結合などから、福建には独特の社会関係が育まれたことを明らかにした。中央政府にとっては、統治を継続するために、新たな体制改革が求められた。それこそが、月港を開く起因となった。

第五章では、明代の福建の海禁について、明と琉球そして日本の関係をめぐる、福建の知識人や福建在任官僚らの海禁論に注目した。福建の各地域ごとに、その主張が相違することから、地域社会の実像を探ることができる。また时期的な視点からすると、朝鮮の壬申倭乱、琉球の己酉倭乱の影響により、中央では、海禁論が一時的に強化される。しかしながら、福建にかかわる士大夫の多くに、港を開くべきとの論調が根強かった。福建の下級地方官や豪民、および人民の生活のために海上交易をおこなっている実状を既定の事実としていたからである。そこで国家の方針である嚴禁策をそれにいかに当てはめるかという点が問題となった。そこに福建巡撫をはじめとする地方官、中央政府の福建出身者たちの苦心があった。

近世福建の地域社会において、海をめぐる国家、地方、社会の間に複雑な相互作用があった。本研究では、そこに絡むさまざまな歴史的な出来事に関連で地域社会を考察した。福建をあらわす呼称

を朱子学の興隆の視点から検討することにより、福建人の自我意識の成長を歴史学的に明らかにした。人口増加と海外貿易の発展により、宋代以降の地域社会においても、福建人の自我意識成長を背景に、媽祖信仰が涵養され、民間信仰と相互扶助が普及した。元代には、泉州は国際港として成長したが、明代になると、厳しい海禁政策のもと、複雑な要因により、特異な社会関係がはぐくまれた。つまり宋以降長い時間軸の中に、地域社会の経済、文化、思想の変化の視点を総合することで、福建の近世像の一面を明らかにすることができた。